

6 月第 3 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 6 月 18 日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節第 4 主日

■説 教： 保科けい子 牧師

■説教題：「 救われるべき名 」

■聖 書：使徒言行録 4 章 1～14 節（新約 p219）

■讃美歌：55 「 人となりたる神のことば、」
474 「 わが身の望みは 」

ペンテコステは、弟子たちに聖霊が降り教会が生まれた日、つまり教会の誕生日であるということ、既に何度かお話したと思います。聖霊が降った証拠は、弟子達が大きく変わった様子が誰の目にも明らかに見えることでした。この日から、集まっていた弟子たちが主イエスにおける神様の大きい救いのみ業を力強く宣べ伝え始めた、つまり、今日の教会で使われている言葉で表現すれば伝道が始まったのです。特に、弟子の代表のように考えられていたペトロは、約束された聖霊を注がれた後ではまるで別人のように変わって、旧約聖書の御言葉を何度も引用しながら力強く説教をする者になっていることは、既に先週と先々週の説教でお話しました。また、先ほど読んでいただいた使徒言行録4章13節には次のように記されています。「議員や他の者たちは、ペトロとヨハネの大胆な態度を見、しかも二人が無学な普通の人であることを知って驚き、また、イエスと一緒にいた者であるということも分かった。」ここから、初代教会の中心にいるのはペトロとヨハネであることが分かります。

使徒言行録の3章に、彼らがエルサレムの神殿の門前で生まれつき足の不自由だった一人の男を癒したことが記されています。そして、この癒しの奇跡に驚いて集まってきた人々に神殿の境内で力強い説教を語りました。本日の聖書箇所4章4節には、そのような彼らの伝道によって多くの人々が信じ、「男の数が五千人ほどになった」と記されています。この数字が正確かどうかは定かではありません。しかし、ペトロとヨハネの伝道によって多くの人々が主イエス・キリストを救い主と信じたことは確かです。そして本日の箇所には、そのことによって彼らが神殿を管理していた人々やユダヤ人の指導者たちに捕えられ尋問を受けたことが語られています。このことから分かるのは、主イエスを信じて集まっている者たちがそれだけ目立って力を持った存在として認識され始めたということです。ペンテコステの出来事からまだそれほど日が経ってはいないのに、こういう妨害にあうほどにその群れは大きくなっていました。そして、このような妨害にあったからこそ、後に「初代教会」と呼ばれるようになった群れは、ますます力強く大胆に御言葉を語るようになり、ますます大きく充実したものへと成長していったことがこの第4章に語られているのです。

4章の5節から14節には、逮捕され一晩監禁されたペトロとヨハネが、次の日に「議員、長老、律法学者」たちの前に引き出されて尋問されている様子が描かれています。特に7節以下のやり取りに注目したいと思います。エルサレムの指導者たちが「お前たちは何の権威によって、だれの名によってああいうことをしたのか」と尋問したときに、ペトロが聖霊に満たされて力強く弁明しています。ペトロもヨハネも元はガリラヤの湖の漁師でしたから、「無学な普通の人」と記されるように、特に聖書についての学びをしたわけではないのです。しかし、10節、11節では旧約聖書の詩編118篇を引用しながら語っていることが記されています。「あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。この方こそ、『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、隅の親石となった石』です。」ここで、指導者たちの問いに明確に「神の権威」によって「ナザレの人、イエス・キリストの名」によって、癒しを行い御言葉について語っているとはっきりと宣言しているのです。「議員、長老、律法学者たち」というエルサレムの指導者たちを詩編118篇の「あなたがた家を建てる者」になぞらえて「あなたがた」と呼び、あなたがたが十字架につけて殺した主イエスを、神様は「隅の親石」としてお立てになり、その「ナザレの人イエス・キリストの名」によって、生まれつき立つことも歩くこともできなかった人が癒されたのだ、とペトロは語りました。隅の親石というのは、石を積んで建物を建て上げていく中で、アーチのてっぺんに置かれ、それによってアーチが全体の重さをしっかり支えることができるようになる石（キーストーン）のことだと言われています。ペトロはここでも、十字架につけられ、神が死者の中から復活させられた主イエス・キリストのことを詩編の御言葉を引用しながら論証できるほどに、その存在が大きく成長しています。12節にあるように「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」と力強く断言しました。先週も、先々週も繰り返したことですが、2000年の間、キリスト教会が繰り返し繰り返し、主の日ごとの礼拝で宣べ伝えてきたことは、この一点に尽きます。

ところで、私たちは「名」ということにあまり馴染みがないかもしれませんが、しかし、私たちはどのようなお祈りであっても、最後には「イエス・キリストの名によって」と祈ります。私は「イエス・キリストの名」ということを考えるときにいつでも、ヨハネによる福音書14章13節と14節に記されている主イエスの御言葉を思い出します。「13 わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。14 わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。」と、主イエスは弟子たちとの最後の別れの食事の場面で約束なさっています。

ヨハネによる福音書では、その約束に続いて、弁護者として真理の霊を遣わして下さることが語られているのです。そのようにヨハネによる福音書と使徒言行録とを重ねて読むときに、私たちに「救われるべき名」が示されており、祈りへの道筋が示されていることに気づかされます。そのように考えますと、祈りの言葉一つであっても、聖霊によらなければ本当は私たちの口から軽々しく発することはできないことも示されます。今このときも、私たちを支え導いてくださる聖霊の働きに感謝しながら、主イエス・キリストによる救いの恵みと主なる神様の慈しみ深い愛を覚えて、祈りつつ新しい一週間へと押し出されてまいりましょう。